≪読売新聞≫表題の旧字体表記について

張立新 *

Abstract: This article focuses on studying the formation of the writing system of traditional Chinese characters employed by the *Yomiuri Shimbum*, and elaborates an individual opinion of this. It refers to written sign system of patterned Chinese character, it should be known from the written sign system of Chinese character under normal circumstances, which is difficult to judge with right or wrong. In the daily education of Japanese, we should follow the Present Font Table of Chinese Characters, which was issued by Japan's cabinet office in 1949.

はじめに

≪読売新聞≫は 1874 年 11 月 2 日に東京で創刊し、既に 140 年あまりの歴史をもつ新聞である。1978 年に、ギネスブック（1978 年版）に発行部数世界一であると記載されている。1994 年 5 月に、発行部数は 1000 万部、2003 年には 1400 万部を突破している。こんなに世界でも有名な、強い影響力のある新聞表題の旧字体表記は≪讀賣新聞≫となっている（付録 1 を参照に）。しかし、よく見てみると、“讀”の右上は“士”ではなくて、“土”となっていて、“賣”の上は“士”ではなくて、“十”となっている。まさか、この世界で発行部数最大の有名な新聞には表題の旧字体表記が間違っているであろうか。本文ではこの≪読売新聞≫表題の旧字体表記について考察してみたいと思う。

一、“讀賣”という旧字体の成り立ち

まず、“讀賣”という漢字につき、次の書籍の中の記載を見てみよう。

中国東漢の許慎撰≪説文解字≫においての記載。

> 讀：誦書也。从言賣（士の下は四、筆者注）聲。
> 賣：出物貨也。从出从買。

中国清の時代張玉書など編≪康熙字典≫においての記載。

> 讀：≪唐韻≫≪集韻≫≪韻會≫徒谷切≪正韻≫杜谷切、从音獨。

---

* 張立新：首都師範大学教授。

≪徐鍇曰≫讀猶瀆也。若四瀆之引水也。
賣：≪唐韻≫≪集韻≫≪韻會≫≪正韻≫从莫懈切、音邁。≪註≫徐鍇曰：貨精、故出則買之也。≪九經字様≫隷省作賣。

日本の平凡社編白川静著≪字統≫においての記載。

讀：声符は賣（士の下はアミガシラではなく四である、音読みはショク、筆者注）賣に瀆（トク）・牘（トク）の声がある。
賣：初形は出と買とに従う。買（网（あみ）と貝とに従う。网は網。多くの貝を買い集めることをいう。“同書 686 頁参照”）に対して、出買することを賣（売）という。

上記の記載から少なくとも次のようなことが分かると思われる。

１、“讀”の右部分の“賣”は“賣”と、意味も音も違うもので、別字である。２、その表記も上に述べた“士”と“十”との違いだけではなく、その下の部も違うものである。３、つまり“讀”は、その右部分の“士”の下には“四”であって、それに対して、“賣”はその“士”の下には“四”ではなく、“四”の中の曲線が縦画になったアミガシラである。これはおそらく旧字体“讀賣”の正字であろう。４、“賣”の初形として“出”の下には“网＋貝”という表記の時期もあった。それはまた漢字字体変化の歴史に関する問題となるであろう。

現在、簡略化された“読売”の“読”の字のつくりと“売”の字は同じようになっているので、人々は、往々にして、“読売”の旧字体の“讀賣”も、その“讀”の字のつくりと“賣”の字と、同じものではないかと思いがちであろう。しかし、上記書籍の旧字体解釈のことを考えてみれば、それはまったく別字のはずである。それなのに、なぜ新聞の看板とも言える表題の≪讀賣新聞≫題字の旧字体表記はそうなっているであろうか。それは書道の世界の話になると思われる。

二、“讀賣”題字の隷書体

実際、旧字体でも簡略された字体でも書道の世界では幾種類もの字体があるわけである。私たちが普段使う漢字の表記は大抵楷書である。そのほかには、また行書、草書、篆書、隷書などがある。現在の≪讀賣新聞≫の表題“題字は 1946 年 7 月 1 日付け朝刊から使われています。当時の新進書家・印南渓龍（いんなみ・けいりゅう）が隷書体で書きました。……印南は 3 日間で 100 枚超の題字を揮毫し、5 枚ほどの候補の中から編集局長が選びました。”（讀賣新聞の会社案内より）。

それでは、印南氏は何を参照にしてその題字を書いたであろうか。書道も中国から日本に伝わったもので、もともと、中国の隷書体は篆書から変化したもので

ある。その漢字の篆書体から隷書体に変化した経緯および隷書の特質などにつき、清の顧藹吉撰の≪隷辨≫においては詳細述べられている。≪隷辨≫を調べてみたところ、印南氏の隷書題字の“讀”、“賣”と、同じような隷書体が見つかったのである（付録 2、付録 3 の字体を参照に）。これらの隷書字体は皆、篆書体から変化してきたものである。“讀”の篆書体は右部分の“賣”は“士”の下には皆“四”となっている。それに対して、“賣”の篆書体は“士”の部分は“出”と、“出”の下には“网＋貝”となっていた。こう見てみると、いわゆる隷書体は、篆書体から簡略された字体であるということがよく分かると思われる。例えば、顧藹吉撰の≪隷辨≫（付録 3 の“賣”の按）において述べられたように、“賣”はまず、“出”の下に“网＋貝”という字体から、“士”の下に“アミガシラ＋貝”という字体に簡略され、また、その“士”をさらに“十”というように簡略されたのである。このような簡略は特に秦の始皇帝時代から篆書体より隷書体に変化する際、よくあったことである。そうしたら、旧字体の“讀賣”の隷書体題字は中国の≪隷辨≫にもある隷書体で、間違いではないということが分かる。当時の印南氏もそのような隷書体を参照にして書かれたことであろう。

しかし、隷書体、特に≪隷辨≫の隷書体を知らない読者からその表題の題字が誤りで、違っているではないかという指摘がよくあったことであろう。誤解のないように、“読売”と、現在通用されている字体表記に変えれば宜しいようであるが、なにしろ、新聞の看板とも言える表題は長年かけて世間に売り込んだ商標のようなものでもあるし、題字の特殊の風格や美しさもあるので、そう簡単には改められないことであろう。

三、漢字表記正誤の判断規準

このようになると、漢字表記の規準に関わる問題が出てくると思われる。特に日本語教育の場合、常に漢字の正しい表記をするよう、十分な注意を払っているようである。その漢字表記の規準、つまり正しいか間違っているか、その判断の基準は、一応≪当用漢字字体表≫（昭和 24 年・内閣告示）を参照することになるであろう。ところが、≪讀賣新聞≫表題の旧字体表記のような特殊な漢字表記もよくあるものである。“讀賣”だけではなく、≪朝日新聞≫の表題題字を見ても、その“朝”も“新”もまた普段と違う表記となっている。これもやはり簡単には誤りと言えず、その書体の由来を考察する必要があると思われる（その問題は今度の機会に譲りたい）。それから、旧字体表記以外にも俗字や極端省略という漢字もよく見かける。例えば、厂（歴）、仂（働）、巾（幅）などのようなもの、これは“讀賣新聞”表題の旧字体表記などと違うタイプのような表記で、本当に言え

ば改めたほうがいいと思う。

前にも考察した通り、≪讀賣新聞≫表題の“讀”と“賣”というような旧字体表記は、隷書体で書かれ、≪隷辨≫にもあるわけである。それは一種特別的な文字表記で、誤りとは言えない。そして、長い歴史のあるもので、≪当用漢字字体表≫になくても、改める必要がないかも知れない。

要するに、それは正規の漢字表記を超えた、書の美術的な世界に属するもので、いわゆる一種の図案化された、ロゴのような表記となっていて、普段の漢字字体表記と区別する必要があると思われる。ところが、日本語教育の場合、例えば、漢字テストのような時には、そのように書けば、やはり間違いと判断され、減点されることであろう。普段の漢字字体表記となると、特に日本語教育の世界では、やはり≪当用漢字字体表≫に従うべきであろう。

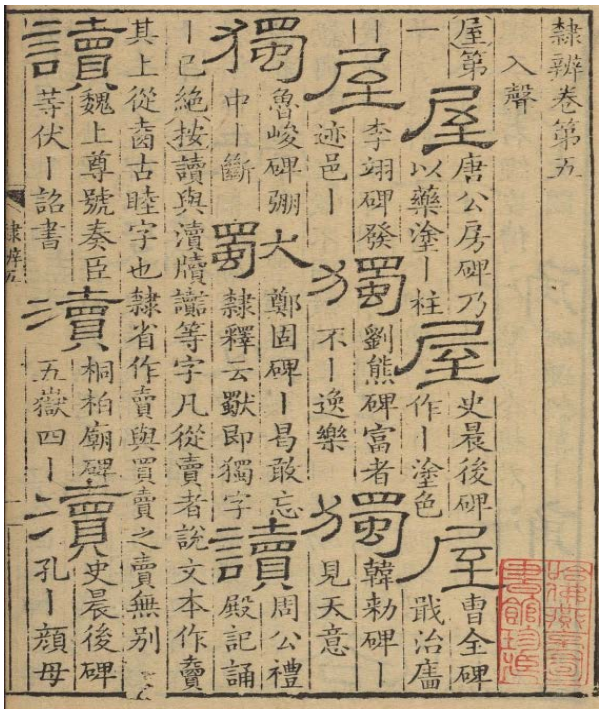
おわりに

≪讀賣新聞≫表題の旧字体表記につき、また世間では“十を売って十一人に読んでもらおう”という謂れがあるようである。つまり、多くの人々に読んでもらいたい、もっと読者を増やそうという気持ちを込めて、“讀”の右上は“土”、“賣”の上は“十”というように表記されたと言われている。こういう噂みたいなことは、本文の考察範囲以外のことで、あえて触れていない。それは、恐らく根拠のない、単なる人々の善意的な想像に過ぎないことであろうと、ここで特に断っておきたい。

参考文献：
≪説文解字≫（漢）許慎　撰（宋）徐鉉　校訂　中華書局　2014 年版
≪康熙字典≫（清）張玉書など編　中華書局　2004 年版
≪字統≫　白川静　著　平凡社　2002 年第 2 版
≪隷辨≫　8 巻　顧藹吉　撰　（清）乾隆 8 年黄晟据康熙 57 年項氏玉淵堂刻本重刊、1743 年
≪当用漢字字体表≫　日本国語審議会編　（1949 年・内閣告示）

付録１：

付録２：



付録３：